渋沢栄一書「夢把」七言軸について

吉　田　　悟

目次

はじめに
1　渋沢栄一の書
（1）栄一の書の系譜
（2）栄一の書風の変遷とその揮毫
（3）栄一と書家
2　渋沢栄一と漢詩
3　「夢把」七言軸について
おわりに

はじめに

渋沢栄一（1840 ～ 1931）は，江戸・明治・大正・昭和という激動の時代を生きた実業家で，その生涯のうち創設または深く関わった会社は約 500，社会公共・教育などの事業も約 600 が挙げられるなど，近代日本を代表する人物である [1]。「論語と算盤」はその実業家としてのスタイルを表現するものとして，栄一を象徴する言葉である。

渋沢栄一は，2024 年度から政府発行の新一万円札の肖像として採用されるとともに，2021 年の大河ドラマの主人公として取り上げられたことにより，

俄かに関心が上昇した。

栄一は「青淵」と号し，江戸からの余風を受けて，明治期の多くの政財界人・文学者たちがそうであったように，多くの漢詩と共に墨蹟を残している。その書風は極めて温和でゆったりとした筆致を思わせるが，同時に強靭な骨格を擁して墨痕淋漓としたものである。筆者が郷土の深谷市にある渋沢栄一記念館で展示されていた作品を観た際には，その力量に吸い寄せられるような思いであった。

もっとも，栄一の書や漢詩は実業家という本来の栄一の顔からすれば，余技の領域の話となる。栄一の能書は当時から有名で揮毫依頼が絶えなかった。しかし，明治という時代は，日下部鳴鶴や巌谷一六を中心に錚々たる書家が一時代を築いた時であり，漢詩も隆盛を極めた時代であったから，財界で生きた栄一の書や漢詩は二次的な存在とならざるを得ない。ただ，「翁の和歌、漢詩、文章、または書が余技の域を脱して居たのも道理であるを覚ることが出来るのであります」との言葉通り[2]，特に書においては，その余技の領域を超える魅力を有していると言える。

このたび，筆者は渋沢栄一の書を収蔵した方から，その書を実際に拝見する機会を得ることができた。これを一つの契機として，渋沢栄一の書，そして漢詩について触れ，実見した渋沢栄一の書についての考察を加えたい。

なお，渋沢栄一の資料として，『渋沢栄一伝記資料』（全 57 巻，別巻 10 巻，索引 1 巻）が刊行されており，現在はデジタル化されて渋沢栄一記念財団のホームページで公開されている（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』）[3]。これは語彙による検索が可能で，著作権が残るものは例外となるが原本も参照できる。本稿ではこの両方を使用して論考を進めた。

栄一の年齢については，栄一自身の記録との混同を避けるため，当時の習慣である数え年として明記することとする。

1　渋沢栄一の書

栄一は書をよくし，多くの墨蹟を残している。現在でもその故郷の深谷市では，多くの栄一の筆になる碑石を見ることができる。筆者も「可堂桃井先生碑」「備前渠改閘碑」などを実見した。後者は篆額が徳川慶喜の筆，碑文が栄一の楷書からなるものである。

現在，栄一の書をまとめて見ることができる資料として，『渋沢栄一伝記資料』別巻９巻の遺墨集[4]，そして『青淵渋沢栄一の書』[5]，『渋沢栄一碑文集』がある[6]。ほかにも各美術館や団体，個人が収蔵するものが多数あると予想され，図録類があれば，それらからも資料を集めることが可能である。

条幅作品については，多くは自身の漢詩を書したものであり，他には論語を節録したもの，『古文真宝』所載の文章や，唐・宋詩を書したものなどが散見され，和歌を書した仮名書きも見られる。こうした作品で栄一が落款として使用するのは，「栄一」「青淵」の他，「青淵小史」「青淵漁者」「青渕釣夫」「青淵生」「青淵逸人」「青淵老生」「青淵老人」などである。

以降，便宜上『渋沢栄一伝記資料』別巻９巻の資料を①，『青淵渋沢栄一の書』の資料を②とし，それぞれの資料に作品番号が付されている場合はその作品番号を記し，無い場合にはページ数で明記することとする。

なお，栄一は手紙や文書などの書も残しているが，本稿で論じるに際しては，漢詩や漢文を書した漢字書，特に条幅の書作品を主な対象としている。

（１）栄一の書の系譜

栄一は書について，幼い頃は父・市郎右衛門（号は晩香・1809 ～ 1871）に手ほどきを受け，次に叔父である渋沢宗助（号は誠室・1794 ～ 1870）に教えを享けたことを述懐している。

「私は一番最初，お父さんから手本を書いて貰つて，それを習つた。…それから更に進んで，お父さんのお兄さんで宗助と云ふ人―此人はお父さんの生まれた家を嗣いだ人だが―誠室と号して中村仏庵の門人であつた。唐様の書をうまく書いた人だが，何でも顔真卿や柳公権を学んださうである」[7]

栄一が生まれた渋沢家の中の家は，血洗島村（現深谷市）にある十数軒の渋沢家の宗家ともいわれ[8]，父・晩香はこの家を嗣ぐため東の家より婿養子として入った。父･晩香は，麦作や養蚕の他，藍作･藍玉製造，販売につとめ，半農半商の家として資産を築き，名字帯刀を許された。また学問を好み，詩を賦し，俳諧もするなど深い教養を擁していたことが伺える。その父に従い，栄一はまず学書に励んだのである。幸田露伴は，このことについて次のように述べる。

「習字もまた父から受けた。市郎右衞門の自書の消息往来が猶存してゐるが，當時の普通の俗體よりは正しい方へ立優つた好い字體である。八歳頃より論語の素讀をやはり父に受けた。二人の子を失つた後に得た榮一に讀書・習字等をみづから授けた市郎右衞門は，如何に樂しくも亦優しく愛に滿ちて教へたことであろう。…其初頭に於て自他に浸徹し貫通融合するところの愛を以て教へられ導かるゝことは，絶大な幸慶であつて，…所謂其頃の教育の専門家たる寺子屋の御師匠様に託されなかつたことは，確かにこれもまた一幸慶であつたに疑無い」[9]

その父・晩香の書は，栄一が昭和５年に刊行した『晩香遺薫』としてまとめられている[10]。司馬温公家訓・朱子家訓や，五教・修身など，漢学の基礎の手本として書かれた楷書や，商売往来，消息往来などの手本，漢詩，俳句などが収められている。これらを一覧すると露伴が指摘したように，清勁で瀟洒とした風韻があり，栄一が「書も巧みで，残つて居る物を見ると，百姓としては非常な能書と申してよい程であります。…字体なり運筆なり実によく出来て居るのに，今更ながら感じ入つた次第であります」と述べているのも頷ける[11]。

さて，伯父の宗助は晩香の出た東の家を嗣ぎ，三代目宗助となった。養蚕や藍玉の製造販売でよく利益を上げつつ，「養蚕手引書」という指導書も編んだ。また神道無念流の奥義を究め，書においては中村仏庵の門に学び，栄一をはじめとする近隣の子弟に教えた。まさに多能な人といってよい[12]。

宗助が書を学んだ中村仏庵（1751 ～ 1834）は，名は蓮，字は景連，仏庵

と号し，幕府畳方の棟梁でありながら書，特に隷書や梵字をよくした人である。また古物収集と鑑定にいそしみ，それを通じた文字の副次的コレクションを創る「文事」に熱中し[13]，好事家の集まりとして有名な「耽奇会」の一員であった。

その「文事」の一端は，唯一の著と言われる『崑岡炎餘』の引に「是に先んじて佛庵老人，花街總門焚餘の柱を得て，河翁（市河寛斎）の北里歌，柏翁（柏木如亭）の吉原詞，池翁（菊池五山）の續吉原詞各々若干首を鏤る。以て之を小梅精舎の園中に建つ。一奇事と謂ふべきなり。搨本流傳して覧る者麕至す」と記されていることから伺える[14]。このような仏庵の「文事」は，現在「黒本尊縁起」「吉原考証」などで見ることができる[15]。

その書については，横倉佳男氏の論考に詳しい[16]。それに拠れば，仏庵の学書に関しては，行書では趙孟頫が第一，次いで董其昌と続き[17]，またその残されている碑石から推するに，楷書は柳公権の玄秘塔碑の風が見られ，当時としては先鞭をつけたものとされる[18]。

仏庵の門に学んだ宗助の墨蹟は『深谷郷土文人遺墨集』に[19]，父晩香や次章で触れる学問・漢詩の師である尾高惇忠のものなどとともに掲載されている。それを見ると，宗助の書は隷書によるものが多く，これは仏庵の書風をよく継承している。また行書・草書の書風を見ると，栄一の書風に大きな影響を与えていることが伺える。

宗助の行書・草書については，ほかに『誠室先生書』（埼玉県立図書館蔵）でも見ることができる。これは「藤王閣」「黄鶴楼」「登金陵鳳凰台」を書した折帖であるが，「庚午重陽後二日，書于梅松精舎，盤石翁，誠室」との落款が記されている。書風は骨格の強い方勁な行書と円転鮮やかな草書を織り交ぜたもので，趙孟頫や文徴明などの影響を視野に入れつつも，その直線的な表現を見ると，やはり仏庵の書風が根底となっていると言える。

なお，宗助には柳公権の「玄秘塔碑」の臨書も残っており[20]，これも仏庵の書流を汲んでいる証となる。栄一の書に顔・柳の法があることは，本章の冒頭で触れた「備前渠改開碑」（① p.321）や「須永伝蔵碑」（① p.322）の楷

書からも確認でき，行書・草書を含め，宗助の下での学書が栄一に大きな影響を与えていることが看取できる。特に青年期における顔・柳体の学習が，栄一の書の強靭な骨格の礎となっていること，仏庵の書流が宗助を通じて栄一まで及んでいることが注目される[21]。

次に栄一の書に影響を与えたとされているのは，藤森弘庵（1799 ～ 1862）である。藤森弘庵は，名を大雅，字を淳風，号を弘庵，晩年に天山とした。弘庵はひどい短視であり，そのため剣技をあきらめ学問に専念したと伝えられる[22]。

江戸の一柳家で祐筆，そして幼い世子に経書を教えるなどして仕えたのち，土浦藩に仕えた。しかし土浦藩内で起用に反対の声が挙がり，江戸で塾を開いたのち，水戸藩の御出入となる。このころに書かれた「海防備論」「芻言」が著名であるが，後者は徳川斉昭に認められ水戸藩の御出入を開いた一書である。まもなく，弘庵は安政の大獄に連なり中追放の処分を受け，千葉に謫居したが，このことが弘庵の名を一層高めることとなった。これ以降天山と号し，諸国に遊び，江戸への赦命が下りるものの病没した。門下に川田甕江・依田学海がいる。

弘庵の書については，望月茂氏の『藤森天山』に詳しく記載されており，「衆人が見てもつて評するところは，巻菱湖の筆法が多分に取入れてあると思はるる事である。天山の周圍の情勢より推せば，詩佛とも菱湖とも關係があるので，これら兩先輩に書法を問ふといふことは認め得らるゝ。他は彼が好むところの米，蘇，褚等の法帖を臨書して，自ら一家の風をつくり出したものと見るのが至當であらう」としている[23]。

今弘庵の書として伝わり見ることができるものとして，例えば『弘庵先生遺墨帖』や「廿歳云々七絶」については[24]，明らかに巻菱湖の影響を強く受けた書風であることが分かる。後者の七絶は「廿歳官遊蛇畫足，浩歌長鋏決然歸。不須説着行藏意，拖杖江東見晩暉」と書され，「弘庵大雅」と署名がある。「正氣歌」は謹直な行書で書かれたもので[25]，一見して米芾の強い影響が見て取れる。

弘庵の書は著名になってからよく売れたようで，望月氏は「書に工なるは，固より餘技ではあるが，天山の場合は此の餘技が生活のたつきとなってゐる。無名人の頃は版下をかき，有名人になつて後は，その揮毫は飛ぶやうに賣れたので，彼の行先行先で，莫大の潤筆料が，懐に入つてゐる」と記している[26]。

さて，その弘庵と栄一の関係であるが，次のような記述が目に留まる。

「先生が幼時より膠漆の交を締したるは、従兄尾高新五郎・同長七郎・同渋沢喜作なりき。新五郎は即ち藍香にして、先生の師事する所、長七郎は剣客を以て夙に四方を周遊し、ほゞ時勢に通ず、喜作は先生と書剣の師を同じくする竹馬の友なり、先生常に此三人と往来して、文武を講習し知見を磨きたり、尚遊歴諸家の来る時は、就きて教を請へることも亦多かりき。…これ皆先生二十才以前の事なるが、其後藤森天山名は大雅、別号を弘庵といふ。も亦来りしかば、就いて意見を問ひ、且其揮毫などをも請ひたりき。且先生が商用を帯びて旅行する次には、信州の人木内芳軒名は政元、字は子陽。上州の人金井烏洲画を以て名あり、金井之恭の父、烏洲は先生の父晩香翁とも交あり。武州阿賀野の人桃井八郎名は之彦、畳山と号す、儀八の長男。等各地の人々をも訪へり」[27]

文中に出てくる新五郎は尾高惇忠の通称，長七郎はその弟で，後に高崎城乗っ取り計画を止めた人物である。また渋沢喜作は計画取り止めの後，栄一と江戸から京都へ逃れ，共に一橋家に仕えることとなる。

これによると，栄一が弘庵と交流したのは弘庵が江戸から追放され天山と号を変えてからのことで，おそらく上州に遊んだ時に立ち寄ったのであろう。栄一には「和藤森天山先生之韻二首」とする五言の漢詩が残っているが[28]，これはこの時の交流によるものと思われる。

栄一は天山に揮毫を請うたとあるが，「翁は生れ乍らの近眼で，講釈をする時は，顔を殆んど書見臺の書物の上へピタとつけるやうにして居つた。揮毫の時も，文鎮に黒糸をまきつけておいて，紙の上へそれを縦に引張つて来て，字列がみだれぬやうにしてあつた。さうして，長鋒をもつて，眼を紙へこすりつけるやうにしてかく」とあるから[29]，この時も天山は紙に眼を近づ

けながら揮毫を行ったであろう。栄一は時勢を論じ，揮毫する天山の姿と墨蹟に何か心動かされるものがあったのであろうか。

なお，金井烏洲は名を時敏または泰，字を林学，烏洲と号した南画家，勤王家である。金井之恭は字を子誠，金洞と号し，やはり勤王の志士として活動をし，明治政府に出仕。貴族院議員に勅選され，明治を代表する書家である。この父子との交流については後に改めて触れる。

最後に栄一の書に大きな影響を与えたのは趙孟頫である。栄一の言を引用する。

「ところで最近ではおひおひ年取つて来るにつれ，暇も出て来て多少昔を顧みてぼつぼつ古い慰みに帰つて来た。然し最早誠室先生の手本位では満足出来なくなつて，今では時々古法帖を見てゐる次第である。それでは古法帖の内では誰のものが一番いいかと云へば，私は趙子昂が一番習ひいいやうな気がする。…書家仲間には王羲之の書が非常に尊ばれるが，どうも私が王羲之の書はうま味がわからない。実は一年ばかり王羲之を習つた事があるけれども，どうも其骨がつかめなくて，及びもつかぬ気がしてやめて仕舞つた。そこへ行くと子昂のものは私の手に合ふのか，筆癖を真似る事が出来るやうに思へるし，筆意も幾分理解される」[30]

栄一の日記には，趙孟頫の臨書をしたことが記されている箇所がいくつか出てくる。

終日趙子昂墨帖ノ臨書ヲ為ス（明治 40 年 8 月 7 日）[31]

八時半新聞紙ヲ一覧シ、後揮毫ヲ試ム、午飧後庭園ヲ散歩シ、又揮毫ニ勉ム、夜ニ入リテ教育勅語ヲ浄書ス、又趙子昂赤壁賦ヲ臨ス（明治 41 年 2 月 18 日）[32]

此夜揮毫ニ努メテ折手本二本ヲ揮灑ス、趙子昂臨摹ヤリ、夜十二時就寝（大正 8 年 5 月 27 日）[33]

栄一は 90 歳となった昭和 4 年（1929），趙孟頫の「大学」「前赤壁賦」を臨したものを『大學及前赤壁賦』として友人に頒っており（① p.206 ～ 266），実に栄一の趙孟頫への傾倒は 20 年以上，晩年まで続いたことを物語っている。この刊本はその栄一の長きに亘る趙孟頫の学書の集大成と位置付け

られる。

栄一が趙孟頫に惹かれた理由を考えると，先に触れた宗助の師・仏庵からの書の系譜を考えると自然であり，青年時代から慣れ親しんできた書風の源である趙孟頫に誘われるように学書したことには蓋然性がある。

また，江戸時代はその船舶経路の地理的な理由から，趙孟頫の法帖類が多くもたらされ[34]，多くの江戸の書家はその書法を探求するために趙孟頫を学書した。日下部鳴鶴も若い頃は趙孟頫を学んだとされており[35]，江戸から続く明治に入っても，趙孟頫を学書の対象として選択することはごく普通の感覚であったであろう。

ただ，ここで別の角度から取り上げたいのは藤田東湖の事である[36]。東湖は主君の徳川斉昭をよく輔佐した後期水戸学を代表する人物であるが，書をよくし四男の小四郎・信が画を描いて東湖が賛を書いたものも残している。

栄一は24歳の時，2つ年下である22歳の小四郎と会っており，一橋家に仕えてから再び会おうとした際には，既に天狗党を率いて挙兵していたために，叶わなかったことを述べている[37]。

徳川斉昭の追鳥狩に強い感銘を受けた尾高惇忠の影響もあり，惇忠とともに水戸学へ傾倒していった栄一であるが[38]，実際に東湖と会うことはなかった。このような思いを栄一は次のように述懐している。

「其頃尊王攘夷に熱中する私共は益々水戸学を崇拝すると同時に、烈公の人と為りを深く欽仰し、併せて東湖先生を敬慕し、其の著作の常陸帯や回天詩史抔を愛読したのであります。常陸帯は烈公が水戸家御相続当時からの有様を記事体に書かれた二冊の書籍であります。又回天詩史は一篇の七言古詩でありますが、実に先生の艱難辛苦を吟詠された深い意味を含んで居るものであつて、私は今日も尚之を暗誦することが出来ます。…左様に先生を欽慕して居りましたけれども、私は前に述べた如き農民で素より深い学問もなく、又水戸に遊んだこともありませぬので、終に藤田先生の謦咳には接することが出来ずに仕舞ひました」[39]

東湖の『回天詩史』や「和文天祥正気歌」などは栄一に限らず，幕末の志

士たちに大きな影響を与え，暗誦されたものであるから，栄一の述懐にはさして驚きもない。しかし，栄一にとっては，水戸出身の慶喜を主君と仰ぎ，東湖の高弟である原市之進が民部公子の伴としての栄一の渡仏行きにも関わっていたなど，特に身近な存在と感じられたことであろう。

東湖の書については，「菊池仙湖氏の説によると，先生の書は，大體三變してゐるやうに思ふ。第一期は，父幽谷の書に私淑し，おとなしい書風だつた。次は，二十二歳頃から支那の趙子昂に傾倒し，そこから得るところがあったらしいが，第三期に入ると先生獨自の書風を發明し，その個性の赴くところにつれて全く他に類なき書風を創造した」とされている[40]。東湖の書に趙孟頫の書法があることが注目される。

また，栄一は巻菱湖について，「此人は趙子昂を学んだ人で，顔真卿や柳公権とは大分書風が違っている。…書家として名を揚げた人は皆な唐様で，顔真卿や柳公権もしくは趙子昂などを学んで，然る後一種独特の自分の流儀を書くやうになつたのである」としている[41]。さすれば巻菱湖の影響が見られる弘庵の書にも趙孟頫の書法が底流にあることとなり，この二人の先人が趙孟頫の書法を宿していたことは，栄一とは無縁ではあるまい。栄一が老年に到り趙孟頫を選んで学書したことは，青年時代から養われてきた書の技法的な親和性があったからだけではなく，精神的な親和性をも内含していたからではなかったかと考えられる[42]。

（2）栄一の書の変遷とその揮毫

栄一の書は先述の通り自作の漢詩を書したものが多いが，『青淵詩歌集』での年代を基礎として，これらの作品のある程度の書写年代を推定することができる[43]。ここでは，それらを基に栄一の書風を便宜上，以下の三期に分けて考えることとする。なお，無記年の作品の推定は『青淵詩歌集』の年代を基に，書風による分析を加え，筆者が任意に行ったものである。

第一期は青年期から壮年期前期にかけてであり，おおよそ 40 歳ぐらいまでの期間を捉える。第二期は 40 歳くらいから 60 歳くらいまでの期間とし，

第三期をそれ以降とする。

第一期は草書体が多く，結体も引き締まったものが多い。①4・5・6・14・22・23・36・37，②2・3・5などが挙げられる他，栄一が渡仏中に千代に送った，髷を切った写真の裏側に書かれた自作詩を書したものは小字ながら痛快な連綿草である[44]。

第二期は壮年らしい充実とともに円熟さが加わり，徐々に体勢が解放されていく時期である。行書に草書そして連綿を織り交ぜながら書かれたものが多く見られる。①9・20・21・24・25・38・39・40・41・42・45・47・48・49・94，②1・6・7・8・9・10・11・33・50などが挙げられる。

第三期は円熟が老成となる。第二期からの書風が続くが，次第に栄一は趙孟頫の学書を深めていき，その影響か単体の行書に時折草書交えた書きぶりが中心となる。また，露鋒による起筆の打ち込みと遅筆による線の縮みが加わり，字粒が小さくなるにつれて董其昌のごとき風貌を備えたものが現れる。栄一が「老人」「老生」など「老」の字を使い始めるのは60歳を過ぎてからである。管見の限りでは，この時期の書がやはり多いようである。作品例が多いので列挙しない。

栄一が故郷で揮毫を行った記録については，一番早いもので，「是年栄一、埼玉県大里郡明戸村大字沼尻ノ村社熊野神社ノ扁額ヲ揮毫ス」（明治3年・1870年）と見え[45]，続いて「是年栄一、埼玉県大里郡明戸村村社諏訪神社ノ扁額ヲ揮毫ス」（明治26年・1893年）[46]，「是年栄一、埼玉県大里郡八基村大字血洗島諏訪神社改築費ニ金五百円ヲ寄附シ、更ニ金一千五百円ヲ寄附、且、石柱並ニ本殿扁額ノ社名ヲ揮毫ス」（明治30年・1897年）[47]，「是ヨリ先三十八年十月、当社（諏訪神社：筆写注）幟旗新調ノ議起リ、是日栄一、村民ノ求二応ジテ揮毫ス」（明治39年5月20日・1906年）などが残っている[48]。

明治19（1886年）年6月18日の日記には「此日午前六時発ノ汽船ヲ以テ新潟ニ赴ク筈ナリシカ、朝来暴雨ナルニ付行ヲ止ム、第六十九銀行員及高野徳平等来テ酒ヲ侑ム、酒間小妓数輩ノ舞伎ヲ見ル、又揮毫ヲ望ム者多シ、依テ十数葉ヲ揮灑ス、此夜又唐津屋ニ宿ス」とある[49]。

明治 19 年は栄一 47 歳で，実業界で様々な事業に関わり激務に追われていた時期である。この当時で栄一の書についての評はかなり高く，多くの揮毫依頼が寄せられていたことが伺える。

栄一の子である秀雄は父の姿について次のように述懐する。

「父は知らない人からも，大変な数の揮毫を頼まれていたので，ひまを作っては和服にタスキがけで，よくキヌやヌメに古来の金言を書いた。むろん論語の辞句も多かったが，そのほかのものも沢山あった」[50]

こうした姿は，栄一が 70 歳で実業界からある程度身を退いてからのものかと想像されるが，このタスキをして揮毫している栄一の写真が残っており，様子を伺うことができる[51]。

このように膨大な揮毫依頼があったにも関わらず，栄一は終生，書家的ないしは文人的生活に浸ることはなかった。別邸，のちに栄一の本邸となる飛鳥山にはある程度の書画[52], そして茶室の無心庵にはかなり高価な茶器も揃っていたようであるが，それはあくまで外交接待のために供したものであった[53]。こうした栄一の姿勢は以下の言で明確である。

「私は四十三年間実業家に身を投じ昨年七十七歳の頽齢を迎へ、断然私の事業関係と絶縁する事に致しました。けれども花鳥閑月を侶とし、又は書画骨董を弄びて余生を送ることは私には出来ぬ処であります、況んや今日の風雲は国家非常の時であります、例令自己一身の収支計算に基く事業と絶縁することは出来ても、国家を思ふの情を辞する事は断じて出来ませぬ。故に余生は出来得る限り一般の共利公益に尽さんと思ひます、老衰の残生が役には立ちますまいが、振興事業に就いては今後も引続いて微力を致す所存であります」[54]

書画骨董に没入しない栄一の姿勢は，当時の著名人が書画骨董の収集で様々なエピソードを残しているのと好比を為している。財力・実力ともに引退後は詩書三昧の趣味世界に没入することができたにも関わらず，その道を選ばなかった栄一の思いがこの演説には端的に表現されている[55]。

そのためか，栄一は揮毫の際には以下のような姿勢を貫いている。

「朝飧畢テ揮毫ヲナス，午飧前後ヲ通シテ五時間余ニ及フ，然レトモ其揮灑セシモノハ額面題字又ハ幅物等ニテ五拾枚ニ至ラス，以テ余カ運筆ノ如何ニ遅鈍ナルヲ見ルニ足ル，蓋シ揮毫ハ只自己記憶ノ警句又ハ好文字ヲ紙面ニ揮灑シテ目前之ヲ玩味スルニ在リ，故ニ人ノ需ニ応シテ時々運筆スルモ素ヨリ古人ノ書法ヲ習得スル事ナク，所謂自己ノ一流ニシテ，要ハ只胸ニ記憶ノ文字ヲ筆ニシテ紙面ニ現出スルニアリ，是レ余カ揮毫ヲ為スノ主旨ナリトス」（大正４年８月18日　日記）[56]

ここに記されている「古人ノ書法ヲ習得スル事ナク」「自己ノ一流ニシテ」とは，先に確認した栄一の学書の経歴を考えると，いくつもの碑法帖の学書を通じて一家を築く書家仲間を念頭に置いた謙遜とも見えるが，この日記には栄一の揮毫に対しての姿勢がよく描き出されている。

なお，ここで書かれている栄一の遅筆については，この時期に著しくなった特徴と考えてよいであろう。第一期・第二期の書風を見ると，幾分か早めに執筆していると見られる作品が散見されるからである。

さらに，栄一は書に臨む時の感想を次のように述べている。

「それから書を書く時の感想に就いては，私は字を書いてゐる間，外の事は何も頭に浮かばなくて無心になれるのが大変愉快である」[57]

若き頃から暗喩してきた詩文や自作の漢詩を，胸中に想起される文字の姿に随い，無心に紙面に書きつける姿。先のタスキをかけた姿と共に，栄一の書に臨む光景が眼に浮かぶようである。

ところで，石川九楊氏は明治の創業期の企業家たちの書を「企業家ではないが近代化のイデオローグであった福沢諭吉に見られる，明治の政治家，思想家に通じる豪快，豪放の書の系譜」，「渋沢栄一の書に代表される，穏やかで個性を隠した書の系譜」，「安田善次郎，大倉喜八郎の書画，茶道趣味と悠々自適の生活の中から生まれる‘和様’に連なる系譜」と分類した上で，栄一の書について，以下のような指摘をする[58]。

「渋沢の書になると，幕末維新期の政治家，思想家の豪快，豪放さはまったく影をひそめ，おとなしく，耳目を驚かすようなところはまったくない。

…字形，大小，傾き，運筆，書線‘筆画’の肥瘦，配置，どこを取り上げてみても，軌道を外れる無理なところはなく，わがままな自己主張もなく，平易，穏当である。…

字形も率直で淡々とした構成を見せている。…無理にデフォルメする意志は見られず，文字自身のもつ規範構造を信頼し，自然にまとめ上げている。流れに逆らわず，外部へのあたりもソフトで，材料の持ち味をうまく引き出すコンダクターという感じだ。…

政界と財界をつなぎ，その協働関係の中核となるという渋沢のような役割は，個的に湧き上がるものを抑制したこの種の書き手にしか担えなかったという推量も成り立つ」[59]

石川氏が指摘したこの栄一の書風は，先述の栄一の揮毫スタイルに拠るところも大きいと思われるが，より根本的な態度がそこにはあると考えられる。試みに，栄一の『論語講義』を紐解くと，こうした栄一の書の特徴に対する回答が垣間見える。

栄一は『論語』の「公治長第五」で，顔淵，子路が志を述べたあと，孔子が「老者は之を安んじ，朋友は之を信じ，少者は之を懐けんと」と述べたことについて，「孔夫子の志に至っては，天のごとく広く，海のごとく深し。すべての人に対して仁を以てせられ，包容的の所が言外に溢れておる」とした上で[60]，次のように述べる。

「かくなるには，まず第一に常識が発達しておらねばならぬ。善功に伐り労責他人に転嫁するようの人は，常識に乏しいからである。…しかして常識の根蔕となるものは，同情心であることを知らねばならぬ。精神の根蔕に同情心がなければ，人の常識は決して発達せぬものである。…

孔夫子の志に至っては，子路のごとく客気に逸った所もなく，顔淵のごとく超越脱俗的もなく，温乎として玉のごとく，大いに常識に富んだものである」[61]

栄一の中で，論語における仁や忠恕，中庸といった言葉がどのように咀嚼されているかよく分かる内容であるが，『論語講義』では随所でこの「常識」

という表現にぶつかる。つまり，栄一が重視したのは家族や友人そして他者を思いやる心であり，社会や国家の発展に対する忠義心，そしてそれを現実に実行する上での常識の重視である。この常識は前者の裏付けがあってこそ深まるのである。

この上で，栄一にとっての書を論語の表現を借りて論じれば，「道に志し，徳に拠り，仁に依り，芸に游ぶ」君子の書，文飾に陥らない常識的な「文質彬彬」たる姿が理想であり[62]，石川氏が指摘した特徴は，むしろ論語を生涯の糧とし上記のように咀嚼してきた栄一の帰結すべき姿であったと言える。

では，栄一はどのような本質をその書に見ていたのであろうか。栄一は父・晩香の遺墨集『晩香遺薫』を刊行する際，次のような序文を寄せている。少々長いが，栄一の書に対する思いを知り得る文なので，引用したい。

「書は以て名姓を記するに足るのみ、学ぶに足らずとは楚の項羽の豪語なるも、爾後彼土の文運隆興するに随ひ、書道も亦発展し、漢魏より明清に至るまで幾多の名家輩出して各其長所を発揮し、以て大に文化を裨補したり、されば我邦にても其影響を受け、台閣山林を通じて筆札の技に勉焉せしかば、古来能書を以て称せらゝ人士の多き殆ど枚挙するに遑あらず、然るに幕府の末造以来泰西の文物移入して、苟も学に就くものは其流風を追ふに忙しく、筆札の如きは措いて問はず、唯塗鴉を事とし恬然として恥ぢざるのみならず、甚しきは筆札に巧なるものを目して世事に迂なりとし、其拙なるものは即ち日新の学事に忠なる所以なりと曲解するに至れるは、実に慨歎に堪へざるなり，余が先考晩香翁は同族渋沢宗助君の第三子にして、…其筆札に巧なるは夫の顔骨柳筋既に専家の域に入れりと称せらゝ長兄誠室君の筆力にも譲らざるものあり、以て其人格才識を知るべきなり、惟ふに古人は書は心画なり、心正しければ筆正しといひて筆蹟を以て人格の反映となせり、余は頃日郷里の生家なる渋沢元治・治太郎兄弟より其秘襲せる先考の遺墨を借覧して、深く此に感ずる所あり、且当年の慈育と訓誨とを追懐して之を徒爾に看過すること能はず、…蓋し余は敢て児孫に向つて先考の筆蹟を誇らむとするにあらず、唯此本を受くるものをして常に

之を愛読し、因りて以て先考の高風を偲び大に感発する所あらしめんことを庶幾ふのみ」[63]

冒頭に項羽の例が引き合いに出されているのは，若き栄一の姿が重ね合わされていると考えられる[64]。書をないがしろにする時勢への慨嘆とともに，最晩年に栄一が書に対して「人格の反映」との思いを吐露しているのは，父から教わることによって始まった，栄一の書に対する積年の思いを表出したものと見ることができる。

日頃からの思いやりや忠義の心をもってして，極めて温和に常識的に，かつ無心に書に向かっていく―そこに技法を通じた人間としての書が生まれてくる。いわば栄一にとっては，日頃の行動に裏付けられた己の人間性が，書に端的に表現されていくという特性こそが書の醍醐味であると信じ，自己流と言いながらも数多くの揮毫に応え続けて筆を執ったのではあるまいか。

（3）栄一と書家

最後に，栄一と書家の人達との関わりについて言及しておきたい。

栄一が書家と一定の交流を持ったことは，先述の「書家仲間」という栄一の表現からも看取できる。この書家仲間が具体的にどのような人物であったか，特定は難しいが，大方の推測をすることができる。というのも，栄一が書家に依頼をして立碑をした記録が残っているからである。以下，列挙していく。

まずは，父・晩香の招魂碑の「晩香澁澤翁招魂碑」である。これは晩香が亡くなった翌年の明治5年に成ったものであるが，撰文が尾高惇忠，篆額が巌谷一六，銘文が日下部東作すなわち鳴鶴になるものである。現在は谷中霊園から栄一の生家の庭に移設されている。

次に尾高惇忠の頌徳碑となる「藍香尾高翁頌徳碑」である。この碑は明治34年に亡くなった尾高惇忠のために明治42年に，故郷の鹿島神社内に建てられた頌徳碑である。高さが4.5メートルと北関東でも有数の名碑であり境内に荘厳な雰囲気が漂う。三島毅撰，徳川慶喜篆額，日下部鳴鶴書である。

なお，鹿島神社の扁額も栄一が揮毫して現存している。

鳴鶴の手になる栄一が関わったとされる碑はほかに，「鶴彦翁略伝碑」がある。鶴彦翁とは大倉喜八郎であり，栄一にとっては事業出資のパートナーであった。喜八郎は大倉集古館を創立し，大正4年に男爵に叙せられている。三島毅（中洲）撰，山縣有朋篆額，鳴鶴書，大正4年7月のものである。この碑の除幕を前に，三島・日下部を含め参会者が会食を共にしている記録が残っている[65]。

また，「移建愛蓮堂記」は，古稀を記念して関係会社から栄一に寄贈された「愛蓮堂」についての記であり三島毅撰，日下部野鶴書となっている。この記については，三島毅が撰文を仕上げたのち，栄一が揮毫および浄写をしている記録が残っているから，その後どのような経緯，どのような形で鳴鶴が書したのか不明である。おそらく形式からすると碑として建立されたのであろう。三島の稿が仕上がり，栄一が揮毫をしている記録は明治43年9月と11月の日記に，日下部鳴鶴の記事は明治44年4月の竜門雑誌に掲載されている[66]。

鳴鶴は官を辞め書家として自立する際に，碑銘などの揮毫に進んで応じることを決めており[67]，現在確認できるだけでも300基を超える揮毫を行っているから[68]，こうした記録は大きな数字とは言えない。しかし，父・晩香の招魂碑はその鳴鶴の碑銘揮毫の先鞭をつけるものであり，両者の関係として注意されてよい。

巌谷一六は上述の晩香の招魂碑の篆額以外に，母の招魂碑である「先妣澁澤氏招魂碑」の篆額および碑文の揮毫を行っている。撰文は栄一である。母えいは，明治7年に逝去したが，この碑は明治16年に建てられたものである。こちらも谷中墓地から栄一の生家の庭に移設されている。

鳴鶴や一六は栄一とともに，明治4年7月29日の任官に記録として残っている[69]。栄一は「枢密権大史」，一六は「枢密少史」，鳴鶴は「枢密権少史」である。もっとも栄一は大蔵省の仕事で追われ，この官自体も8月10日廃されているから[70]，3者の交流の傍証とはならないが，同じ官吏として書を

よくした鳴鶴･一六とはある程度の交流があり，こうした揮毫依頼につながったと考える方が自然と思われる。

長三洲については，栄一の妻千代が亡くなった際の墓表を書いている記録が残っている。三島毅撰，明治 16 年 8 月書，11 月 14 日建と記されている[71]。この揮毫をめぐっては，撰文の三島毅と次のような手紙をやり取りしている。

「御亡閨御碑文続テ作リ可申之処，…尚又書家ハ誰ニ御頼み候哉（太字ハ朱書）**再考スルニ手間取リ半年モ一年モカヽリ申候**，石工黄雲ハ長三洲之字ハ能ク彫リ候へ共、岩谷・日下部ノ字ハ不得手ニ御坐候、僕是迄恒ニ申付経験御坐候、然し思召ニ万異存ハ無之候へ共、清書済之上ハ一応御見せ可被下校正仕度候」（明治 15 年 8 月 20 日）[72]

揮毫にあたって，撰文を担当している三島が，書者と石工の相性を助言しており，当時の揮毫依頼の一側面を見るようである。栄一は三島の助言通り長三洲を選んだこととなる。またこの時期，すでに三島との交流が始まっていたことが分かる[73]。

なお，鳴鶴・一六・三州の三人は，明治 13 年 8 月 29 日に栄一が飛鳥山別邸で，清国の大使，何如璋を接待した際の出席者として名を連ねている[74]。やはり当時からこの三人とは面識を持ち交流があったことが伺える。

最後に，先に取り上げた金井烏洲・之恭父子との交流について触れたい。

之恭は明治天皇の前で揮毫を披露した一人に挙げられるほどの，明治を代表する書家であるが，栄一ともつながりがあった。先に父･烏洲は，栄一の父･晩香との間に交流があったことが出てきたが，後に之恭は第一国立銀行の株主として名前を連ね，たびたび株主集会で発言をしている記録を残している[75]。

この父子との交流の一つの集大成ともいうべきものが，「烏洲金井先生碑」の撰文および揮毫である。この碑は金井烏洲を顕彰するための記念碑であり，現在も伊勢崎の華蔵寺公園内にあり，拓や詳細は『渋沢栄一碑文集』に載せられている。またこれに併せて，栄一は副碑の撰文・揮毫もしており，「金

井烏洲とその一族の墓」の入り口に建てられた[76]。

栄一はその碑文の除幕に際し，次のような言を寄せている。

「顧みすれば明治維新前，所謂黒船の来朝後と云ふものは鎖港攘夷と云ひ，勤王倒幕と云ひ，…江戸に近い武州や上州に又各々其の地方の風が吹いたので，渋沢も其の風に動かされて郷里を出ましたが……爾来大義名分と云ふことに重きを置き，国論の大勢に順応して匪躬の節を致したのであります，此点が即ち烏洲先生の所志と一致する点でありまして，其子の金井之恭氏とも其後交際するやうになりましたのも，結局其の主義主眼を同うするからでありました，今回碑文の撰述や揮毫をお引受けしたのも斯る縁故に因るのであります」[77]

この碑は題額も栄一の筆からなり，高さが6メートル近く，本文が753文字の圧巻のものである。一文字一文字がゆるぎなく楷書で書かれており，90歳の筆とは思えない堂々たるものである。まさに，栄一の旧交に対する深い情義心を感じさせる一碑となっている。

今回は以上の限られた範囲で論じたが，今後，未見のものや新出のものでこうした書家仲間とのやり取りが見つかれば，更に栄一の交流の一側面を明らかにすることが可能であろう。

2　渋沢栄一と漢詩

前章の冒頭で触れた通り，栄一は，はじめ父・晩香より学問を教わった。そしてのちに従兄である尾高惇忠（号は藍香･1830～1901）に教えを享けた。惇忠は，学を好み，ほぼ独学で四書五経を修めたという。先述の通り，水戸学に影響を受け，栄一と共に高崎城乗っ取りを計画したり，喜作や平九郎とともに振武軍を起こして戦ったりした。のち，明治政府に出仕し，富岡製糸場の初代場長となる。

『渋沢栄一傳』では，栄一が惇忠から学問を教わったことについて，次のように記述している。

「榮一が新五郎に就いたのは幸運であつた。たゞに句讀訓詁を受けたといふのみでは無く，其の爽利な學問の方法と，能く自ら教ふる習慣とをも知らず識らずの間に受取つたのである。…新五郎の栄一に授けた學問の方法は，一處に固滯して膠着するよりは，進み進んで，そして其の得たるあるところを擴めてゆくといふ方であった。で，栄一は十二三歳に及んでは伯父宗助の子の新三郎の手から通俗三國誌などを借りて讀得るに至り，新五郎も之を否認せぬのみか，讀書力を養ふに利あるものは甚だしく猥雜の書ならぬ限りは何でも讀むがよいとの言に從つて，關東のことを記すること多き里見八犬傳などは科外の愛讀書とし，其他雜書をも次第に讀破するに至つた」[78]

そののちに露伴が引くように，栄一は『藍香翁』の序に次のような文を寄せている。短い一節ではあるが，栄一の惇忠に対する敬愛の念が伝わる一文である。

「余の学を修め人と成るに至るもの実に翁の薫陶に依らすむはあらす、是を以て余深く翁を敬愛し、終始悖らすして管鮑の交を全ふしたるもの固より偶然にあらさるなり」[79]

栄一はこの時に惇忠から漢詩も教わった。若き頃，父晩香や惇忠とともに，商用のために信州を旅した際の紀行文と漢詩集を惇忠がまとめた『金洞紀行』が残っているが，そこには栄一の詩とともに晩香や惇忠の詩も記されている。『晩香遺薫』の凡例では，晩香の漢詩は少ないとされているから，貴重な作である。

序は栄一の手になり，「学問博く通ぜば，則ち其の発する所の言の文と為り，行儀篤実なれば，則ち其の楽しむ所の遊の雅と為る。是の故に文章は鬼神の感を動かし，遊楽は聖賢の致を得る者にして…，然れば則ち此の書を以て，驕吝趨利の人をして，遁世清心の士と，名利の間に遊楽有りて紛冗の中に余暇有るを知らしむる可きなり」と記されている[80]。

また，今回の大河ドラマのタイトル「青天を衝く」の由来となった，『巡信紀詩』は，惇忠と栄一が商用のために同じく信州に旅をした際の詩を集め

たものである。この序は惇忠の手になるが，次のように記されている。

「我は青淵と，倶に刀陰の耕夫にして，鬻藍亦た箕裘の業たるのみ，只だ文を論じ詩を賦すを以て楽と為すは，二人の私なり。今茲の十月業を以て信に入り，一蓑単刀，数巻の書を携へ，初六日を以て行を啓く。…而して詩文の癖，安んぞ萌さざるを得んや。或いは途上立談し，巌頭に筆を把り，茶肆晷を移し，旗亭に闌更する有るに，未だ必ずしも興に乗じ詩を賦せずんばあらず…」[81]。

まさに，両者からは，青年時代の純粋な志や微笑ましい旅行の様子とともに，その中で漢詩を愛好した姿が看取される。

その栄一の漢詩であるが，現在まとまった資料として参照できるものは，孫の敬三が栄一の三回忌の記念としてまとめた『青淵詩存』[82]，さらに三十三回忌の節目に，前者をもとに日記から増補して，諸橋轍次氏が編集・書き下しを行い，歌とともにまとめたものが『青淵詩歌集』である。前者は『渋沢栄一伝記資料』に分載されているが，敬三が述べている通り，後者が定本となるであろう。なお『青淵詩存』は，松本芳翠氏の端麗な楷書で書されている。

『青淵詩歌集』には栄一の漢詩として283首が収録されている。年代で見ると，20代までで86首，30代は13首，40代は34首，50代が12首，60代が34首，70代が52首，80代が30首，90代が7首，年次未詳のものが16首となる。個人の収蔵になる書に記されているものや，編纂以降発見されたものなどを合わせるともう少し多くなりそうではあるが，概観を知ることはできる。

栄一は漢詩を詠むことを好み，渡仏の際に船中で詩作に耽ったり，同伴した水戸藩の人達と闘詩をしたりしたことも記されている[83]。上記の年代別の詩作数を見ても，終生漢詩を作ることによって，感懐を寄せる楽しみを持っていたことが分かる。

その栄一の漢詩であるが，絶句での平仄や韻に関する問題を馬嶋春樹氏が指摘している[84]。筆者はこの分野の専家ではないが，試みに栄一の漢詩を調

べてみると，七言四句から成る漢詩は，絶句の体としての平仄が合っている場合と，合わない場合が混在しているようである。後者の場合，任意の句が合わないケースと，全体として平仄が合っていないケースがある。馬嶋氏が指摘するような通韻を誤っているケースを例外として，韻は一句目の踏み落としもなく踏まれていることが多いようである。漢詩の隆盛期となる明治にあっては，少し例外的なものと言える。

もっとも，馬嶋氏の指摘の通り，栄一は韻を絶句の形に踏み，平仄をゆるやかに作る竹枝詞として漢詩を作っている節もあり，先に挙げた『金洞紀行』の第一首目では「賦竹枝」としているほか，詩題として「竹枝」と冠しているものも散見される。

このあたりの事情を考えるに際し，最も好材料なのは，敬三の『青淵詩存』跋であろう。そこには次のように記されている。

「初め祖考は尾高藍香翁に従ひて学び，間ま詩を賦して才力既に非凡なり。既にして時勢搶攘，祖考身を志士の間に投じ，欧西を尋遊す。明治維新後，則ち通貨を興業し，百事一身に萃まり，曾て虚日無し。則ち其の詩を為るや，亦た唯だ境に触れ時に感じ，忠愛纏綿，口を衝きて出で，殆ど構想鍛詞する遑あらざるなり。…但だ憾むらくは校本完からず，捃摭に勉むと雖も，佚者蓋し鮮なからず。且つ魯魚の誤，声調の失とともに，必ずしも之を専家に質さず，勉めて旧觀を存す。…敢て世に公にするに非ず，冀はくは以て家に伝へんか」

敬三の栄一に対する敬愛の念を感じさせる一文であるが，凡そ栄一の漢詩についての前述の疑問への回答は，ここに尽くされている感がある。

こうした栄一の漢詩へのスタンスを知るものとして，石川文吾氏の「神奈川丸上の思ひ出」がある。これは氏が留学を終えた明治 35 年の夏，欧米の旅行を終え乗船した栄一と偶々遭遇し，交遊したエピソードである。

「海に明け海に暮れる日数も重なり愈々帰国の日も近づいたとき，故子爵はデツクチエーアに横はりながら小生に一絶を示された。…転結は慥か

鵬程万里今将尽　天末遙看台湾山

と言ふのであつた。…小生は是非子爵の手書せられた紙片を得たいと申出で，併せて‘湾’の字は平仄上如何なるべきかと云ふた処が，子爵は莞爾として小生の非礼を咎めず‘再考して見やう’と云ふので其の場は物分れになつた。其の翌日であつたか，子爵は再び彼の絶句を小生に示されたが，今度は結句を‘天末青螺是故山’と改めてあつたと記憶する」[85]

このエピソードで栄一は，おそらく交流の印，ちょっとした気持ちの表れとして漢詩を呈したと考えられるが，栄一の懐の広さが伺えるエピソードでありつつ，当時の漢詩の素養の高さをも知り得る内容となっている。敬三の記した跋とも考え併せると，このエピソードからは栄一の漢詩を作るスタンスがよく分かる。

栄一が残している漢詩は，訪れた地を詠んだ即事詩のようなものや，元旦や折に触れた感興を詠んだようなものが多いから，激務に追われていた栄一は韻字を合わせて，絶句の体になるべく寄せつつも，竹枝や古詩の体になっているものが多いのであろう。

栄一は漢詩について「ヘボ乍ら詩を作るヨ」と述べているが[86]，これは，栄一らしい謙虚な言としつつも，推敲に時間を費やすことが許されてこなかった自身の漢詩に対する率直な思いでもあったと考えられる。

もっとも，こうした指摘によって，栄一の漢詩としての価値が減じるものではない。敬三の言う通り，それらは栄一の「心の声」であり，実業家として生きた栄一の「至誠の証」であり，書とも不可分のものと言える。

また，栄一は全ての漢詩に対して上記のようなスタンスを取っている訳ではない。例えば，その中にあって，重要な漢詩は推敲を重ねて作っている形跡が見えるのである。

栄一が明治19年，静岡にいる慶喜に呈した「詠岳呈静岡正二位公」は

高風拂盡世間塵，一白清姿逐歳新。

無復雲煙蔽標格，依然氷雪護天眞。

とあり，三句の六字目は挟み平で対応した絶句となっている[87]。なお，この漢詩を書したものは渋沢栄一記念館で見ることができた。書風からすると

漢詩が作られた時期とほぼ同じ頃の書と考えられ，壮年らしい力強さと草書を交えた清新な風韻でありつつ，丁重に書かれた一作であった。栄一の慶喜に対する謹直な気持ちが現れているようである。

また，惇忠の逝去に際して詠んだ二首

人間何處認清姿，夢破春宵玉漏遅。

長憶藍香書院夕，庭前秉燭學詩時。

酬和追随五十年，今宵道骨絶塵縁。

憶君格物致知學，應向九原開別天。

は，ともに絶句としての体になっている[88]。この詩は『藍香翁』『新藍香翁』に栄一の筆になるものが載せられているが[89]，栄一の師・惇忠に対する敬虔な気持ちが書に宿っているようである。

また，明治 42 年，70 歳で大半の事業から身を退いた後に作られた漢詩を概観すると，平仄を絶句の体に合わせているケースが多くなるようである。やや時間にゆとりが出来て推敲する作業が入ってきたのだと考えられる。

学問や漢詩・漢文そして書が，一貫性をもって関連し合っていることは，江戸の唐様から続く伝統であり，漢学を学び，論語を人生の糧とした栄一にとっても当然，漢詩と書とは一体の存在であった。数多くの条幅に，自身の漢詩を揮毫していることが，それを物語っている。

3 「夢把」七言軸について

さて，このたび拝見した渋沢栄一の書をこれまでの論考を基に考察したい。

大きさは，横 44.4 ㎝×縦 142.5 ㎝，紙本であり，本文の漢詩は，

夢把家書帶涙看，醒來轉覺旅魂闌。

分明報道春宵月，繡罷孤衾不堪寒。

と書かれている。この詩は『詩存』『青淵詩歌集』では見ることができないものである。訓読や内容については後述する。今は仮に詩の頭の二字をとって，「夢把」七言軸としておく。

落款は「青淵生」,印は白文で「渋沢栄一」（1.5×1.5）,朱文で「篤太夫」（1.5×1.5），右上に白文による「青淵」（1.2×1.8）の印が捺されている。「篤太夫」とは，栄一が一橋家に仕えるようになった際，武士らしい名をとのことで平岡円四郎より与えられたもので，仏からの帰国後に静岡藩に仕えていた初めまで使用していたものである。

書風は行書に草書や連綿を織り交ぜながら書いたもので，実見した限りでは，執筆の速度は第三期のものに比してやや速く，書風も含めて第二期に属する作ではないかと感じた。

これが栄一の書であると筆者が早断することはできないが，その書かれた字を見ると，現在見られる栄一の書と共通する筆跡が多いようである。具体例を挙げると，

帯（①79），涙（①80），看（①48，②6），醒（②1），来（①25，①49），分（①42），明（①49），繡（①45），孤（①80，②1，②6），不（②1，②10）などである。

このほか，「春」や「月」の書き方は，他のものでも概ねこのような書き方であったため，一々挙げなかった。なお，「夢」字の書き方は①23でも見られるが,「魂」のこの書き方は他の栄一の書では見出すことができなかった。

漢詩の書き下しと訳を試みると以下の通りとなる。

「夢に家書を把り　涙を帯びて看，醒め来りて　転た覚ゆ　旅魂闌なるを。
分明に報道す　春宵の月，繡罷の孤衾　寒に堪えず」

「夢で故郷からの手紙を涙を流しながら見ていたが,
夢から覚めれば旅の心も衰えてきたことが分かる。
外では明るく春の夜の月が出ていることを知らせてくれるが,
刺繡もくたびれた一枚の蒲団では、寒さも防ぐことができないでいる」

寒韻の七言絶句であるが，四句目が読みにくい。繡罷は「繡ひ罷みし」とも読めるが，前の三句からつながらない。「罷」はくたびれるでは平音であるが，例外字として仄音読みをし，六字目は挟み平で対応している。

「家書」の語は，栄一の他の漢詩には「鯨燈紅下讀家書」（泊浪華）という

句があり[90]，栄一が24歳の時，喜作とともに江戸から京に入った頃のものである。「孤衾」も「翻作孤衾于役人」とあり[91]，この頃の詩とされている。「把」の字については，「強把離騒慰孤哀」（至日，夜風雨大到，偶用陸放翁韻）[92]，「夙把浮華付幻塵」（仏から帰国時のもの）との例があるが[93]，これらはいずれも30歳までの詩であり，用語例から考えるとこのあたりの時期の詩作であることが伺える。

これに加えて詩意から考えると，この詩は栄一が故郷から離れ，妻子とも離れていた一橋家時代のものと考えるのが自然であろう。そう考えると「篤太夫」の印も整合性はあるのだが，書かれた時期については，前述の通りもう少し時期がいってからのものではないかと考えられる。

想像の域を出ないが，40代頃，旧作を書した記念として，手元に残してあった「篤太夫」という印を捺したのではあるまいか。旧作を書することは栄一にはよくあることである。

書全体を改めて見ると，淀みなく運筆しており，堂々たる書風である。もし，これらの推測が事実であれば，極めて価値の高い一作と言える。

4　おわりに

今回，一つの作品を契機として，渋沢栄一の書やその漢詩について論考を進めてきた。その作業の過程で，父や伯父から受けた薫陶，そして様々な人達や志士との交流による影響，それを通じて自身の投影のごとく書を揮毫していく栄一の姿が想起され，幕末から維新，そして明治という激動期の書の一断面を垣間見た気がした。

今年度は新型コロナウイルスの影響もあり，リニューアルオープンされた渋沢史料館の訪問を見送った。訪問すればより多くの発見と，万が一の本稿での誤りも訂正する機会もあったかもしれなく，誠に残念であった。筆者は飛鳥山公園で外から史料館や青淵文庫，晩香盧を眺め，無心庵跡をたどりながら栄一の在りし日に思いを馳せた。

筆者の浅学に加え，このような事情もあり，本稿では論考しきれない部分もあり，不足の感は否めない。ここについては，自身の今後の課題としたい。

なお，新型コロナウイルスが猛威を奮う直前，訪問することができた渋沢栄一記念館では，伝記資料やそのデジタル化の内容についてお話を伺うことができ，尾高惇忠生家では，係の方が丁重に案内して下さり，貴重なお話を伺うことができた。心より感謝申し上げたい。

本稿を執筆するに際し，栄一の書の開示を快く承諾して下さった栗原典雄氏に心からお礼を申し上げるとともに，3章の漢詩についてご指導下さった本学文学部の水谷誠教授にも厚く御礼申し上げたい。

※『渋沢栄一伝記資料』（1955年4月～1971年1月）については，繁を避けるために，巻とページ数のみを表記した。渋沢青淵記念財団竜門社編，1～57巻は渋沢栄一伝記資料刊行会刊，別巻10巻は渋沢青淵記念財団竜門社刊。

注）

1 「『渋沢栄一伝記資料』編纂の際に数えてみたところ，実業・経済関係の役職は約五百なのに比し，公共・社会事業関係の役職は約六百あった」 土屋喬雄『渋沢栄一』吉川弘文館　1989年5月　p.260
2 『渋沢栄一伝記資料』第48巻　p.139 （「渋沢翁は語る」岡田純夫編　編者序）
3 デジタル版『渋沢栄一伝記資料』
https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/index.php
4 『渋沢栄一伝記資料』別巻第9　遺墨
5 深谷郷土遺墨集刊行会『青淵渋沢栄一の書』 巌南堂書店　1984年9月
6 山口律雄・清水惣之助編『渋沢栄一碑文集』 博宗堂　1988年11月
7 『渋沢栄一伝記資料』別巻第5　p.711
8 公益財団法人　渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』東京堂出版 2012年10月　p.14
以下，栄一の事績を調べる際には本書を基礎資料として参照した。
9 幸田露伴『澁澤榮一傳』岩波書店　1939年6月　p.9～10
10 渋沢栄一『晩香遺薫』（上・下）1930年

11 『渋沢栄一伝記資料』別巻第8　p.201 「父晩香に就て語る」（竜門雑誌　第500号　昭和5年5月）

なお，栄一はその晩香の書について，続けて「それと申すのが晩香翁は三男で一番上の兄さんが誠室と号して書を好くした。次の兄さんが俳諧に巧みであつたと云ふ風であり，それから姉さんが二人あり，其次が晩香院で，兄さん達とは相当年が違うて居つたから，常に兄さん達に教へられたためでありませう」という。

12 宗助の事績については新井慎一「渋沢誠室」『ふかや』第10号　p57～64，鳥塚惠和男･新井慎一『郷土の先覚　渋沢仁山―関係資料集―』博字堂　1996年5月,『江戸時代　人づくり風土記11　ふるさとの人と知恵　埼玉』農山漁村文化協会　1995年9月　p.258～261を参照した。

13 中村仏庵の「文事」については，ロバート・キャンベル「中村仏庵の文事（一）―柳原邸の文物集散と交遊」『江戸小説と漢文学』（和漢比較文学叢書　第17巻）1994年5月　p.93～116，同「中村仏庵の文事（二）―職人家歴の辞藻―」『語文研究』74号　九州大学国語国文学会　1992年12月　p26～44,同「吉原考証の雅と俗」『雅俗』1　雅俗の会　1994年2月p.32～41，同「すみだ郷土文化資料館藏『清暉園図記』解題と翻印：中村仏庵の文事・その四」『語文研究』86・87号　九州大学国語国文学会　1999年6月　p.77～89に詳しい。また小澤弘「寛永寺蔵中村仏庵書･鍬形蕙斎画 ‘黒髪山縁起絵巻’ について」『調布日本文化』5巻　1995年3月　p.79～126がある。

14 中村佛庵　『崑岡炎餘』中村雲介・宮沢雲山校　1826年（文政9年）

なお，この詳細については，上掲「吉原考証の雅と俗」p.39に記載されている。

15 国会図書館デジタルコレクション

16 横倉佳男「書家としての中村佛庵　一　隷書碑を中心に」『若木書法』2巻　國學院大學若木書法會　2003年3月　p69～81,「書家としての中村佛庵　二　学書とその門流」『若木書法』3巻　國學院大學若木書法會　2004年3月　p42～59ほか

17 同 「学書とその門流」 p.46

18 同 「学書とその門流」 p.50

19 深谷郷土文人遺墨集実行委員会編『深谷郷土文人遺墨集』たつみ印刷　1985年11月

また，深谷市にある華蔵寺の美術館では，これらの人達の書画が展示されている。中村仏庵，渋沢誠室，栄一，金井烏洲，金井之恭などである。展示入替作業中にも関わらず，観覧を許して下さったご住職に，心より感謝申し上げます。

20 『渋沢栄一伝記資料』別巻第10　p.11

21 新井氏は「仏庵には，誠室の師という以上に，我が郷土深谷との関係に深いものがあり，仁山もしくは横瀬荻野氏との間に生じた関係をこそ，まず思い起こすべきなのではあるまいか」と指摘している。前掲11「渋沢誠室」p.61

宗助から栄一に及んだ仏庵の書と郷土深谷との関わりは，より深く探究できる可

能性がある。

22　藤森弘庵の伝記は上野日出刀『梁川星巌・藤森弘庵』（叢書・日本の思想家 37）明徳出版社　1999 年 3 月に拠った。

23　望月茂『藤森天山』藤森天山先生顕彰会　1936 年　国会図書館デジタルコレクション　p.54 ～ 55

24　『弘庵先生遺墨帖』成美堂　1873 年 9 月　国会図書館デジタルコレクション，集雅堂編『勤王志士遺墨集：大礼記念』1929 年　p.99　国会図書館デジタルコレクション

25　偉人遺墨顕彰会編『維新志士遺墨集』 1933 年 p.60　国会図書館デジタルコレクション

26　前掲 23　p.53

27　『渋沢栄一伝記資料』第 1 巻　p.202 ～ 203 （渋沢栄一伝稿本）

28　同　p.200 ～ 201（青淵詩存）

29　望月茂「藤森天山の書風」『南画鑑賞』8(3)　特輯　維新志士の書畫（下篇）1939 年 3 月　p.2 ～ 4　国会図書館デジタルコレクション

30　前掲 7　p.711 ～ 712

31　『渋沢栄一伝記資料』第 29 巻　p.167

32　同　p.169

33　『渋沢栄一伝記資料』第 45 巻　p.524

34　大庭脩「江戸時代に舶載された法帖の研究」『書学書道史研究』書学書道史学会 8 号　1998 年 9 月　p.27

35　西川寧「明治書壇の断面」には，「明治書道といえば楊守敬云々で片付ける。潘存という人がいかにも偉人らしくクローズアップされる。鳴鶴翁が趙子昂で固めて，北魏というよりむしろ隋唐碑に負うところの多いことなどをしらぬ」とある。『西川寧著作集』第五巻　二玄社　1992 年 1 月　p.165

36　このヒントは吉田良次『趙子昂』（二玄社　1991 年 11 月）の p.8 より得た。ここで引用されている幸田露伴の『幽情記』「泥人」は『露伴全集』第六巻（岩波書店 1953 年 2 月）p.128 ～ 137 所載。趙孟頫と妻の管道昇との情愛を軸に描いた短編である。

　藤田東湖については鈴木瑛一『藤田東湖』（吉川弘文館　1999 年 1 月）を参照した。

37　前掲 27　p.322（東湖会講演集　大正 11 年 11 月 25 日）

　渋沢栄一『論語講義』（二）（講談社　1977 年 10 月）では，「余もこれまで永年の間に知り合っておる人物の中で，この人こそ将来必ず豪くなるらめと思いしにかかわらず，早世したと聞き，誠に惜しいことをした，残念なことをしたと思った場合がたびたびありき。その一例を申せば，水戸の藤田東湖の四男小四郎が二十四歳にして武田耕雲斎の乱に加わって斬首の刑に処せられたと聞いた時など，余はこの人にしてこの厄に遭うとは，何たることであろうと愛惜の念を禁じ得なかった」（p.162）

と述べている。

38　萩野勝正『もっと知りたい埼玉のひと　尾高惇忠　富岡製糸場の初代場長』さきたま出版会　2015 年 6 月　p.7

39　『渋沢栄一伝記資料』第 49 巻　p.161

なお，栄一は東湖記念会の会長に推されている。同 p.156

40　高須芳次郎『藤田東湖傳』誠文堂新光社　1941 年 10 月　p.538 ～ 539

41　前掲 7　p.711

春名好重氏は，巻菱湖について「菱湖は初め趙子昂・文徴明・董其昌の書を学んだのではないかと考えられる」と述べつつ，「菱湖は主として唐人の書を学んだのである」としている。また草書について，「趙子昂・文徴明の書を学び，それから唐の李懐琳の ‘絶交書’ を学び，さらに王羲之の ‘十七帖’ や孫過庭の ‘書譜’ を学んだ」とする。『巻菱湖伝』春潮社　2000 年 10 月　p.131 ～ 132

42　なお，趙孟頫については，宋の皇族でありながら元の高官になったことによって貶されることが多い。このことについて栄一は「けれども私は其人格を稽古するのではない，字を習ふのである」と述べている。前掲 6　p.712

43　渋沢敬三編『青淵詩歌集』角川書店　1964 年 11 月

44　『渋沢栄一伝記資料』別巻第 10　p.30

45　『渋沢栄一伝記資料』第 26 巻　p.55

「十余年前鳥井朽腐セルト同時ニ此額モ朽チタレバ其後社務所ニ蔵シ置ケリ」とある。その通り，現在は掛けられていない。現存していれば，早期の栄一による揮毫例となり貴重である。

46　同　p.55　現在は掛けられていなかった。上記と同じようになっている可能性がある。

47　同　p.46　現在でも諏訪神社にある。「正四位勲二等男爵澁澤榮一謹書」とある。

48　同　p.47　鳥塚氏は，栄一が揮毫する以前は誠室の書であったとしている。前掲 12　p.54 ～ 55

49　前掲 44　p.444

50　渋沢秀雄『父　渋沢栄一　新版』実業之日本社　2019 年 10 月　p.390

51　前掲 44　p.246

52　大正 12 年 1 月 5 日の日記には，「此日ハ民国人顔世清氏及代理公使等ヲ招宴スル筈ナレハ、朝来其準備ニ多忙ナリ、十二時頃ヨリ内外来客十数名ニ至ル、洋館応接室ニ於テ接待シ、十二時半食卓ニ案内ス、来会者内外賓主合計十五人、午飧中種々ノ談話アリ、食事畢テ（洋館書斎）書院ニ於テ書画数幅及屏風数隻又ハ画帖ノ類ヲ一覧ニ供シ」と記されている。『渋沢栄一伝記資料』第 39 巻　p.237

53　「雨夜譚会談話筆記」(昭和 4 年 10 月 15 日）では以下のやり取りが記録されている。「敬三。金森が（骨董屋）が申して居りましたが，飛鳥山の茶器は七八万には売れるさうです。それでもお祖父さまは一切骨董道楽はなさらないと云う定評がある以上，

渋沢家が売り立てをしたと言ふのでは一寸お祖父様に相済まぬと云ふので，只今迷つてゐる処です。先生。そうか，売らうぢやないか，売つた方がいい。それは兎に角あの茶席はあれで仲々値打がある。徳川家を公爵にしたのも謂はばあの茶室だからネ」前掲 6　p.681 ～ 682

無心庵は慶喜を伊藤博文と引き会わせ，慶喜の復権に向けて大きな一歩を記した場所となった。空襲で焼けて，現在はその礎石や踏石が残っており，面影をしのぶことができる。

54　栄一が大正 6 年 12 月，北越や奥羽地方を旅した際，盛岡で出迎えた大津知事に対する挨拶である。『渋沢栄一伝記資料』第 56 巻　p.230

55　栄一はまた，「それいわゆる慾なる者は，豈に必ずしも声色財利の慾のみならんや，おおよそ嗜好のはなはだしきは，皆これを慾という。慾のある者は真正の勇気に乏しく，無慾恬淡の人初めて真正の勇者剛者となり得べし，孔夫子のごとき恬淡無慾の人の眼より世間を視れば，あるいは名に趨り，あるいは利に惑い，あるいは声音に溺れ，あるいは書画骨董に耽る等，挙世滔々物慾に耽溺し，勇気のない弱虫に見えたものだろう」と述べ，書画骨董に走らない栄一の姿勢は，論語からの裏付けもあることが分かる。前掲 36　p.95

56　『渋沢栄一伝記資料』別巻第 8　日記（二）他　p.53 ～ 54

なお，前傾 4 で触れられているが，この大正 4 年 8 月は 2 日から 24 日まで，栄一は避暑のために箱根に滞在している。その様子を見ると，旅行前の 1 日に「揮毫スベキモノ，調査スヘキモノ，各書類ヲ検出ス」と揮毫の準備を整え，2 日から 24 日までその揮毫依頼に対応している。引用した箇所以外に，16 日の日記に「八時朝飧シ，後，揮毫ニ勉ム，午飧ノ後モ継続シテ薄暮ニ至リテ止ム，額面題字又ハ軸物等ニテ四十枚余ヲ揮灑ス」とあり，この避暑中での揮毫数を単純に推計すると，おおよそ 200 の揮毫依頼に応じて仕上げたこととなる。先の秀雄の言葉を裏付ける膨大な揮毫依頼数である。同 p.50 ～ 57

57　前掲 7　p.712

58　石川九楊『近代書史』名古屋大学出版会　2009 年 8 月　p.50

59　同　p.51 ～ 52

60　前掲 37　p.132

61　同　p.139

62　栄一は一芸の人を否定していた訳ではない。「単純なる一芸の人でも，三遊亭円朝の落語革新に，九代目市川団十郎の俳優改善に努力して余念なかりしごときは，大いに芸人の品格を高め世人から尊敬せられたのである。芸に遊ぶ社会でも，高尚の気品があって努力すれば，世のため国のためになる仕事のできるものである」と述べている。儒家的な表現ではあるが，すなわち，栄一はその芸に臨む人間の志を問題にしていたと考えられる。

渋沢栄一『論語講義』（三）講談社　1977 年 10 月　p.27

63 『渋沢栄一伝記資料』（晩香遺薫序　昭和 5 年 6 月）第 57 巻　p.115
64 「それから私が十九歳の頃になると，世の中が騒がしくなつて来て，私も国事に心を傾けると云つては語弊があるが，多少とも国事に興味を持つやうになつたから，敢て項羽の轍を履んだ訳ではないけれども，所謂 ‘書は姓名を記するに足るのみ’ で，手習の方はすつかりやめて仕舞つた」前掲 6　p.711
65　前掲 63　p.444 ～ 445
66　同　p.470 ～ 471
67　中西慶爾『日下部鳴鶴伝』木耳社　1984 年 11 月　p.33
68　林淳『近世・近代の著名書家による石碑集成』勝山城博物館　2017 年 4 月　p14 ～ 20
69 『渋沢栄一伝記資料』第 3 巻　p.211
70　同　p.212
71　前掲 31　p.42
72　前掲 63　p474
73 「二松学舎との御関係は、二松学舎の舎長三島中洲翁との関係から始つたもので、令夫人千代子刀自が亡くなられた時、先生は中洲翁にその碑文をお依頼になつた、その文章が簡にして情義を尽し、非常によく出来たといつて、尾高老人〇惇忠なども、感心されました、それ以来先生と中洲翁との交りが始り、儒教についても『知行合一』を主義とし、王陽明学を尊ぶ中洲翁と、論語をもつて実業を経営される青淵先生との御意見が一致し、二松学舎の世話もなさるようになり、のちに『道徳経済合一論』が出来上つたといふわけであります」との記事がある。「青淵先生と儒教」（山田準談話筆記　昭和十六年二月二十一日　於二松学舎　山本勇聴取筆記）
『渋沢栄一伝記資料』第 41 巻　p.451
74 『渋沢栄一伝記資料』第 25 巻　p636
75 『渋沢栄一伝記資料』第 4 巻「1 款　第一国立銀行 株式会社第一銀行」によく見られる。
76　前掲 6　p.98 ～ 104
77　前掲 39　p292　当日栄一は発熱のため欠席した。
なお，この代詞の間に，次のような豊国覚堂氏の覚書が挿入されている。
「私と佐藤藤三郎氏とで老子爵を訪問申上げ，烏洲翁碑の撰文をお願ひした時のお談話に，私の親爺は俳諧を嗜み，烏雄と号して烏川に因み…，烏洲翁とは俳諧を以て交際して居り，烏洲翁の方が点者，即ち先生株の方でありました，又翁の弟の研香さん，此人とは私の若い時分に再三お目に掛つたこともありました，後に内閣大書記官になられた之恭さんとは，しばしばお目にも掛り交際を致して居りましたが……私も烏翁の画はすきで，幾幅か所蔵して居ります」
78　前掲 9　p.17
79 『蘭香翁』（塚原蓼州著　1909 年）および『新藍香翁』（塚原蓼州 原著・吉岡重三

現代文訳青淵澁沢栄一記念事業協賛会　1979年11月）には，栄一のこの序の筆跡が載せられている。

『渋沢栄一伝記資料』　第27巻　p.494

80　前掲43　p.17

81　同　p.26

82　渋沢敬三輯『青淵詩存』1933年

83　『雨夜譚』岩波書店　1984年11月　p.128～129

84　馬嶋春樹「詠物―漢詩と栄一翁」『青淵』第675号　渋沢栄一記念財団2005年6月　p.30～33

85　『渋沢栄一伝記資料』第44巻　p377～378

86　前掲7　p.681

87　前掲43　p.98

88　同　p.122

89　前掲79と同じく栄一の筆跡が載せられている。

90　同　p.57

91　同　p.54

92　同　p.45

93　同　p.80

参考文献（注で取り上げたもの以外）

渋沢栄一述『青淵回顧録』上・下　青淵回顧録刊行会　1927年8月

渋沢栄一述・梶山彬編『論語と算盤』　国書刊行会　1985年10月

渋沢栄一『青淵百話』乾・坤　国書刊行会　1986年4月

渋沢栄一述『雨夜譚余聞』小学館　1998年8月

渋沢研究会『新時代の創造　公益の追求者・渋沢栄一』　山川図書出版　1999年3月

田澤拓也『渋沢栄一を歩く』　小学館　2006年9月

守屋淳訳『現代語訳　論語と算盤』　筑摩書房　2010年2月

鮫島純子『祖父・渋沢栄一に学んだこと』　文藝春秋　2010年10月

泉三郎『青年・渋沢栄一の欧州体験』　祥伝社　2011年2月

安藤優一郎『徳川慶喜と渋沢栄一』　日本経済新聞出版社　2012年5月

公益財団法人渋沢栄一記念財団『渋沢栄一記念財団の挑戦』　不二出版　2015年10月

周見『渋沢栄一と近代中国』　現代史料出版　2016年10月

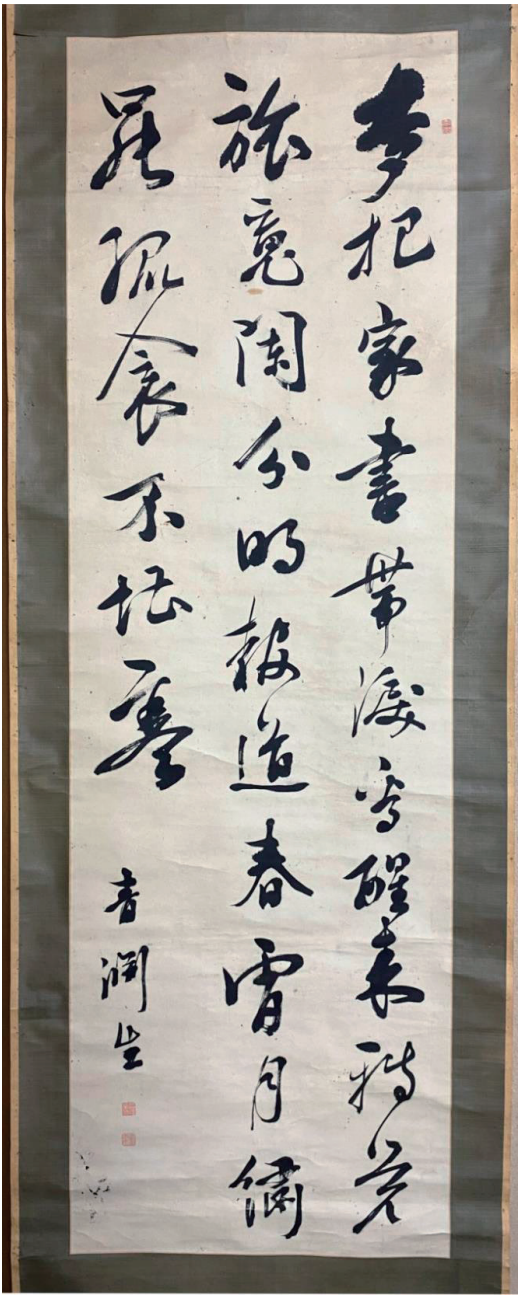
町泉寿郎編著『渋沢栄一は漢学とどう関わったか―「論語と算盤」が出会う東アジアの近代』ミネルヴァ書房　2017年2月

渋沢雅英『太平洋にかける橋―渋沢栄一の生涯―』（復刻版）不二出版　2017年8月

今井博昭『渋沢栄一』　幻冬舎　2019 年 6 月
木村昌人『渋沢栄一』筑摩書房　2020 年 9 月

『書道全集』第 22 巻　日本 9　江戸Ⅰ　平凡社　1966 年 9 月
『書道全集』第 23 巻　日本 10　江戸Ⅱ　平凡社　1966 年 11 月
『書道全集』第 25 巻　日本 11　明治・大正　平凡社　1967 年 1 月
『書の日本史』第 6 巻　江戸　平凡社　1975 年 3 月
『書の日本史』第 7 巻　幕末維新　平凡社　1975 年 3 月
『書の日本史』第 8 巻　明治／大正／昭和　平凡社　1975 年 9 月
中田勇次郎『中田勇次郎著作集』第 6 巻（日本書道史論考・下）1985 年 10 月
近藤高史『明治書道史夜話』　芸術新聞社　1991 年 10 月

猪口篤志『日本漢詩鑑賞辞典』　角川書店　1980 年 7 月
神田喜一郎『神田喜一郎全集』第 9 巻　同朋舎出版　1984 年 10 日
『明治漢詩文集』（明治文學全集 62）筑摩書房　1983 年 8 月
木下彪『明治詩話』　岩波書店　2015 年 3 月



渋沢栄一書「夢把」七言軸

※本画像の無断転載は
ご遠慮下さい。